

9. 乳幼児の歯科保健管理に関する研究

総 括

榑 原 悠紀田郎 ()

1. 研究目標

1才6か月児歯科健診査ならびに指導の効果を十分に発揮させて、幼児の歯科保健管理、とくにそのう蝕抑制のための有効な集団管理方式を確立するための基礎を得ようとすることを目標とした。

2. 研究の直接の目標

- ① 僻地、農村および都市に1才6か月児を中心とする歯科保健管理の有効な実施方式とその効果を検討する。
- ② 幼児の歯科診査時に得られた情報の将来のう蝕罹患の予測性推定の基礎を確立する。
- ③ 市町村で行われる幼児に対する歯科保健管理方式に費用便益的な分析を試み、効率的な歯科保健管理体系確立の端緒をつかむ。

これらの目的を果すため、主として野外研究を中心として研究を行った。

3. 研究結果の概要

① 僻地、農村および都市における幼児歯科保健管理の実施効果に関する検討

(1) 僻地における乳幼児歯科保健管理計画の効果

谷宏は北海道上磯郡木古内町において、昭和51年度昭和54年度までに、1才6か月時から就学時までの幼児に対する、年2回継続的に行ってきた歯科保健管理事業の乳歯う蝕罹患状態および、指導の効果について検討し、う蝕罹患状態はいずれの年齢においても減少したことをみとめ、食習慣において清涼飲料水の摂取については昭和54年度において急激な減少がみられたことをみとめた。

(2) 地方小都市における1才6か月児歯科健康診査のう蝕所有者に関する検討

飯塚、原および安彦らは、昭和53年4月から54年8月までに神奈川県三浦市において行われた1才6か月児歯科健康診査の受検者中のう蝕所有者93名について、問診事項および歯科保健状態について調査し、よごれについては、“きれい”なものはいちじるしく少なく、う蝕は上顎前歯部に圧倒的に多いことをみとめ、問診事項は“おやつを時間を

きめないで与えるもの”に多いことをみとめた。

(3) 都市と農村における1才6か月歯科健康診査結果の比較

森本は東京都練馬区および茨城県基崎村において昭和53年に行われた1才6か月児歯科健康診査の結果を比較し、う蝕罹患状態は、都市部に高く、よごれについては農村部において高い値を示し、これらはその検診の方法に考慮すべき点のあることを示唆した。

② 幼児の歯科診査時に得られた情報の将来のう蝕罹患の予測性推定の基礎についての検討

(4) 幼児のう蝕罹患型の分類と予後の推定

竹内は1才6か月児の上下顎乳中側切歯8歯のう蝕罹患の組合わせにより、3型に分類したう蝕罹患型の予後について、前報にひきつづいて検討し、1才時におけるこの分類の予後との一致性は実用上有用とは考えられなかったが1才6か月時以後ではきわめて有用であることを確認した。

(5) 幼児の歯科健康診査並びに問診結果とう蝕罹患の予測性との関係

榎原、伊塚、中垣および石井は、前報に報告した名古屋市内で定期的に幼児の歯科保健管理を行っている群について、1才～1才6か月時の診査結果および問診結果と、1年6か月後のう蝕罹患状態との関係について調査し、間食回数4回以上、間食からの砂糖摂取量21g以上およびブラク指数2以上の3つの条件のものは1年6か月後のう蝕易罹患傾向を識別し得ることをみとめた。

③ 幼児の歯科保健管理方式の費用便益的分析について検討

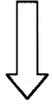
(6) 小都市における乳幼児歯科保健管理の経年的調査 その3 費用分析的検討

榎原、中垣、石井、岩崎および高山は、愛知県尾張旭市において行っている乳幼児歯科保健管理事業について、1才6か月時から継続して管理された群と、2才以降から管理された群とについて、高度う蝕罹患状態を指標として、その費用・便益的分析を試み、この管理方式の改善の必要をみとめた。

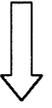
(1) 僻地における乳幼児歯科保健管理事業の効果

谷 宏 (北海道大学歯学部予防歯科教室)

北海道上磯郡木古内町において、昭和51年度より、1歳6か月から就学までの幼児、約600名について、経年的に年2回、歯科保健診査、指導およびう蝕予防処置を行なってきた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目標

1才6か月児歯科健診查ならびに指導の効果を十分に発揮させて、幼児の歯科保健管理、とくにそのう蝕抑制のための有効な集団管理方式を確立するための基礎を得ようとすることを目標とした。